

# 路上生活者が自立し、地域の中で生きていけることを願って

## NPO法人 美野島めぐみの家

週に1度だけでも温かく栄養のある食事を

毎週火曜の昼、福岡市博多区のカトリック教会「美野島司牧センター」に、温かい食事を求めてホームレス者や生活困窮者100人以上が列を作る。炊き出しをしているのが、めぐみの家。代表の瀬戸紀子さんをはじめ30人ほどのボランティアが、毎週大量の食事を作る。季節感を取り入れた野菜たっぷりのメニューは、限られた材料の中で精一杯の工夫が凝らされている。

### ホームレス問題を考える 12

#### グリーンコープとの連携で充実していった支援

2003年、グリーンコープ福祉活動組合員基金から助成金40万円を受け、冷蔵庫や大鍋、食器などをそろえることができた。以降2009年まで、毎年20万円の助成を受けている。2007年「美野島めぐみの家」に改称し、組織を整え新しくスタートした。同じ年、グリーンコープから支援物資として野菜や果物が毎週届くようになった。肉や卵も安く購入でき

#### ここに来た時だけでも人間らしく

瀬戸さんがボランティアをはじめた頃、一人のホームレス者が言った言葉が忘れられない。「俺たちは人間扱いされていない。残飯食べさせて生きている」。胸が痛くなった。「ここに来た時だけでも、人間としての気持ちを取り戻してもらいたい」という思いで、これまでやってきた。「背負ってきたつらさを聞き、よく一緒に泣きました。ホームレス者の多くは、これまでずっと真面目に生きてこられた方です。一人ではどうすることもできない大きな力に翻弄されているような方々もたくさんおられました」と瀬戸さんは彼らへの愛おしさを隠さない。



ボランティアの中には、仕事の合間をぬって参加する人もいます。左から瓜生豊子さん、吉田久美子さん、星野義子さん、代表の瀬戸紀子さん、中島純平さん、梅木幸子さん



2010年1月12日のメニュー。(ミネストローネ風スープ、天ぷらの煮物、人参ライス、いり卵、大根の漬物)



教会の講堂が、臨時の食堂となる

く普通の生活に戻りたいと思っている。しかしひとたびホームレスになってしまえば、社会復帰するためには行政や支援団体の助けがないと難しいという。

#### 生活保護は受けても…

2008年9月のリーマンショック以降、ホームレス者は全国で急増、めぐみの家の炊き出しを求めて来る人も増えた。2008年8月の平均は173人だったのが、2009年3月には最高で333人が炊き出しに並んだ。

福岡市では2009年3月、それまで厳しかった生活保護申請の基準が緩和されたため、生活保護を受け自立していく人が増え、炊き出しに来る人の数も徐々に減っていった。現在は130人ほどになっている。

しかし、それが本当の意味での自立になっているのか、瀬戸さんは危惧している。生活保護を与え住む場所を確保して終わる行政の支援だけでは、十分とは言えない。本来ならアフターケアとして機能するはずの

ケースワーカーの数も、まったく不足している状態だ。

#### 抱樸館福岡で社会復帰の準備を

ホームレス者は家がないというだけでなく、人との絆も失ってしまっている。長い間その状態が続くと、感情を表現することがなくなっていく。お金を使うことも、書類に記入することもできない。そうやって社会に適応できなくなってしまう。せっかく自立してアパートで暮らしはじめても、地域との関わり方が分からず孤立し、また路上生活に戻ってしまう例も少なくない。

自立してからもなお、元ホームレス者の人生に寄り添い、見守っていくという抱樸館福岡の支援は、めぐみの家の考えとも一致する。抱樸館福岡に望むのは、社会に帰る前のステップとしての役割だ。抱樸館福岡で過ごす半年をリハビリの期間として、人とのつながり、社会での生き方を取り戻してほしいと願っている。

また、自立した元ホームレス者が集いコミュニケーション

シヨンでできる場としても、期待を寄せている。

#### 自立した後も皆で集える「ホーム」に

めぐみの家でも、自立した元ホームレス者も自由に来ておしゃべりができるようにしたいと考えている。顔を見せるだけでもいい。寂しい思いをしている人が元気になるって自分の家に帰れるようにしたい。そしていつの日かホームレス者がいなくなり、みんなが幸せになってくれたら。「自立し幸せになっていく時、暗い顔をしていた人がだんだんと明るくなっていく、その過程を見られるのが喜び」と瀬戸さんはその日が訪れるのを待つ。

めぐみの家の活動は、瀬戸さんたちボランティアの熱意と愛情で支えられている。2009年10月、NPO法人格を取得、より社会に認知される存在になった。

抱樸館福岡の開設にあたり、グリーンコープともいっそう協力関係を深め、支援の輪を広げていこうとしている。

### 私のボランティア活動 ホームレスから自立したOさん(男性)

私は55歳。「美野島めぐみの家」という所を知らなければ飯にはありつけなかった。何故なら自分はホームレス。温かいご飯が食べられる!なんて夢じゃないか、そして洋服、下着、靴下、どれもこれもくれる。こんなに貰っても良いのか…。

今度、火曜日の炊き出しには何か手伝うことはないのか?自分から「美野島めぐみの家」の人たちに役にたつ人間なのか見てもらおう。そうしたら友人ができるかもしれない。もっといいことがあるかもしれない。そうして何週間も過ぎ皆の顔を見ていると何かが違う、皆真剣な表情、これが本当の表情、自分も負けてはいられない。

そんな時、仲間のK君が何か違う人に見えてきた。なんと生活保護を受けアパートに入居することを聞いた。うらやましく、ねたましく、えらい。

そう思う自分は生活保護を受けられる身分なのか?瀬戸さんに相談して受けてくれるかととても心配だった。そうしている内に周りがどんどんアパートに入る。よし!こうなったら自分も生活保護を受けてみよう、そうしたら仕事も生活もうまくいくかもしれない。

そうして自分もアパートに入居し家賃、ガス、電気、水道代を支払った。夜寝ていると突然目が覚めた。雨が降っているではないか。屋根があり、周りは壁がある。白いきれいな壁、ダンボールではない。自分をこんな素敵なハウスに紹介してくれたのは「美野島めぐみの家」の人々、ホームレスを助けてくれた「支援センター」の人々。

自分はこれからもっと人を助けてやり「美野島めぐみの家」で土台となるよう奉仕をしたい。 <抜粋>